

修士論文（要旨）

2019年1月

男子青年におけるアイデンティティ発達促進的な親子のコンフリクトの
体験プロセスの検討

指導 井上 直子 教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
217J4010
武田 伶仁

Master's Thesis (Abstract)
January 2019

A Qualitative Study of Parent-Child Conflict in the Process of Identity Development in
Male Adolescents

TAKEDA, Reni

217J4010

Master's Program in Clinical Psychology

Graduate School of Psychology

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: INOUE, Naoko

目次

第1章	問題と目的	1
1.1	青年期における親子関係の問題	1
1.2	青年発達と親子関係	1
1.3	親子のコンフリクト	3
1.4	目的	5
1.5	研究意義	5
第2章	方法	6
2.1	対象	6
2.2	方法	6
2.3	倫理的配慮	8
2.4	分析方法	8
第3章	結果	10
3.1	事前調査の結果	10
3.2	本調査の結果	12
第4章	考察	33
4.1	父親像の変遷	33
4.2	自己形成と親子のコンフリクトの関係性	34
4.3	【家族以外との関係構築】と【安全・安心の確保】の意味	35
4.4	男子青年における父親との親子のコンフリクトの機能	36
第5章	結論と今後の展望	38
5.1	本研究からなされる提言	38
5.2	本研究の限界と今後の展望	39

謝辞

引用文献

付録

第1章 問題と目的

青年期では「第二反抗期」と呼ばれるように、親子関係において不仲や対立といった関係構造が形成されやすいことが一般に言われているが、近年は親子関係のあり方そのものや、犯罪にまでいたるような関係が指摘され問題視されている（厚生白書，1971；チャイルド・リサーチ・ネット，2004）。青年期における発達課題としてアイデンティティの達成が挙げられる（Erikson，1980）ように、青年期では自身を確立していくことが必要であり、その中で親からの分離という課題達成も必要となってくる。親子双方の関係と発達に資する援助を模索するうえでは、子ども側である青年の発達に資するような対立関係を見出すことが必要だと言えるだろう。

本研究では、青年期の発達に資する親子の対立関係として、「親子のコンフリクト」と呼称する概念を用いる。先行研究においては、明確な口論などによるイベントとして顕在化するタイプの対立構造の研究（Tyson & Tyson，1990；河崎，2005；武田，2017）や、距離を取るなど明確なぶつかり合いではない潜在化するタイプの対立構造、およびある一定期間継続する時期としての対立構造の研究（白井，2015）があり、本研究ではこれらを統合して、一定期間に親子間での顕在的ないし潜在的な対立が生起し、その中で青年自身の価値観や親の価値観を吟味し、改めて青年自身の価値観を構成していくという作業が行われることを親子のコンフリクトと定義する。

本研究ではこの親子のコンフリクトの体験プロセスを明らかにすることで、青年期の発達に資する親子関係の体験の一端を示すことを目的とする。

また、男子青年における親子のコンフリクトの体験過程を探索的に描くことにより、親子関係の側面である所謂「第二次反抗期」についての生起要因やそのプロセス、発達の意義の理解に寄与すると考えられる。

第2章 方法

事前調査として、畑野ら（2014）のエリクソン心理社会的段階目録（第5段階）による発達課題達成状況と親子のコンフリクト体験の有無についてのアンケートを18~30歳の男子青年の119名に行った。そのうち、発達課題がある程度達成しており、親子のコンフリクトを体験していた者の9名を本調査対象者とした。本調査では、親子のコンフリクト体験プロセスについて60~90分程度のインタビュー調査を実施した。

分析方法としては、木下（2007）の修正版グラウンデッドセオリー・アプローチ（M-GTA）を用いた。分析テーマは「男子青年における、両親のいずれかを中心とした親子関係の中で生起する“親子のコンフリクト”が生起し、終結するまでのプロセス」、分析焦点者は「親子のコンフリクトを体験し終結しており、自身のアイデンティティを獲得している男子青年」と設定した。

本研究は桜美林大学の研究倫理委員会への倫理審査の申請を行い、許可を受けて実施された（承認 No. 17029）。

第3章 結果

親子のコンフリクト対象によってプロセスの様相が異なることが分析中わかり、分析テーマと分析焦点者、分析対象者の再検討を行った。その結果、分析テーマは「男子青

年における父子関係の中での“親子のコンフリクト”が生起し、終結するまでのプロセス」, 分析焦点者は「父親との親子のコンフリクトを体験し終結しており、自身のアイデンティティを獲得している男子青年」と再設定し、分析対象者は6名となった。

分析テーマ等を再設定したうえであらためてM-GTAによる分析を行った結果、24個の概念と6個のカテゴリーが生成され、生成された概念とカテゴリーの関係性を示す結果図（別紙添付資料参照）とストーリーラインが作成された。男子青年における父親との親子のコンフリクトの体験プロセスのストーリーラインは以下の通りである。

男子青年における父子関係の中での“親子のコンフリクト”が生起し、終結するまでのプロセスでは、まず前提として尊敬の気持ちや仲の良さといった体験からくる『幼少期の父親への好意』を青年が持っている。

『幼少期からの父親への好意』を持っている人は、一方で成長に伴い『親を相対化する横の繋がり構築』『大人の男性との信頼構築』といった【家族以外との関係構築】がなされ始め、【一個人としての自分自身の形成】が始まる。それに影響され、徐々に『父親の主張に対する否認』を意識し始める。これによって『父親の不理解に対する不満』や『自分視点から見た父親の誤謬への不満』が意識化されていき、【理想化された父親像の瓦解】が始まる。【理想化された父親像の瓦解】が起きると、『父親に対する自分の主張』や『父親への無言の抵抗』といった【青年のコンフリクト行動】を起す。しかしながら、【一個人としての自分自身の形成】途中である青年は未だ『自己の不確定さによる持て余す苦悩』を抱えており、『父親への敗北』を喫することとなる。この『父親への敗北』それ自体が【理想化された父親像の瓦解】を進めていき、【青年のコンフリクト行動】は継続していく。

【理想化された父親像の瓦解】や『父親への敗北』、『自己の不確定さによる持て余す苦悩』というようなストレスに苛まされる青年は、より一層【家族以外との関係構築】に進む。その他にも、遊びや相談、憂さ晴らしによってストレスを収める『心の安定化行動』を取ったり、不満をぶついたり理解を得たりする『態勢を整えるための母親利用』をしたり、父親と距離を置く『生活リズムによるコンフリクト保留』を得たりすることで、【安全・安心の確保】を行う。この【家族以外との関係構築】と【安全・安心の確保】によって【一個人としての自分自身の形成】を進める足場が作られる。

【一個人としての自分自身の形成】の中で青年は、【家族以外との関係構築】によって築かれた『好意的な大人の男性からの感化』や『横の繋がりからの感化』を受ける。『心の安定化行動』の中で出会った『コンテンツからの感化』も受け、青年は外からの影響を取り込んでいく。加えて、『主体的体験による自己形成』も進んでいく。就活や一人暮らしといった『生き方の岐路への自覚』も、『自己の不確定さによる持て余す苦悩』から【一個人としての自分自身の形成】への変化を促進していく。このような内外からの変化によって『自己の不確定さによる持て余す苦悩』を減じながら【一個人としての自分自身の形成】は達成していく。

【一個人としての自分自身の形成】が達成されていくと、『父親への敗北』をするような体験が変化し、『父親からの自身の承認』を受けられるようになる。さらにそれは父親の本音などの『実像としての父親との接触』を促していく。『実像としての父親との接触』から『実像としての父親の受け入れ』も進んでいく。これら父との体験と【一個人

としての自分自身の形成】の感覚から、青年は『父親との対等な感覚の形成』をなしていく。このような中で青年は『一個人の父親からの影響を受容』することもありながら、『父親との“対等な他者”関係化』を行い、【大人としての父子関係の構築】が完了する。その完了を以て男子青年の父親との親子のコンフリクトを体験するプロセスは終了を迎える。

第4章 考察

本研究では、男子青年における父親との親子のコンフリクトが、父親との関係の再構築を通して男子青年の発達の指標や自己を形成する場として機能することを示し、そのプロセスや関連する要因が示唆された。父親との親子のコンフリクトを体験する男子青年は幼少に父親に対して好意的なイメージを抱いており、自己形成にともなって理想的な父親イメージが崩れ、対等であろうと対峙し、父親から承認され、対等な関係を再構築するというプロセスが描き出された。さらに、そのような父親との親子のコンフリクトを体験する中で、友人や他の大人の男性といった外との関係を築くことや、外での活動の増加や母親に考えをぶつけることで安全を確保することが、男子青年が自己形成と父親との親子のコンフリクトを進めていく支えになることも見出された。また、男子青年にとって父親が自己形成の達成度合いを示す役割を担い、親子のコンフリクトが自己形成を試すような場を担うことが考えられた。

本研究の結果から、父親とのコンフリクトの最中にある男子青年や取り巻く親を支援するうえでは、男子青年が父親との親子のコンフリクトの体験プロセスのどの段階において、父親や周囲との関係がどのようにあるのかを把握して支援することが重要であると考えられる。青年のコンフリクト行動や外との繋がりの意味を示すことや、父親が男子青年とコミュニケーションを取る姿勢を強化すること、母親が男子青年の感情や考えの受け止め役となることを励ますこと、男子青年が外との関係を持つことを保障することなどが、具体的な支援として考えられるだろう。

引用文献

- Erikson, E. H. (1980). *Identity and the life cycle*. New York : Norton & Company.
(西平直・中島由恵訳 2011 アイデンティティとライフサイクル 誠信書房.)
- 深谷昌志 (監) (2004). 中学生にとっての家族～依存と自立の間で～ モノグラフ・中学生の世界 チャイルド・リサーチ・ネット
- 畑野快・杉村和美・中間玲子・溝上慎一・都築学 (2014). エリクソン心理社会的段階目録 (第 5 段階) 12 項目版の作成, 心理学研究, 85, 482-487.
- 法務省 (2016). 第 3 編 少年非行の動向と非行少年の処遇 第 4 節 家庭と学校における非行, 平成 28 年版 犯罪白書
- 河崎一郎 (2005). 青年期における親との対決経験を通じての超自我内在化に関する研究. 国際基督教大学大学院教育学研究科提出修士論文
- 木下康仁 (2007). ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 弘文堂
- 厚生省 (1971). 第 2 章 児童の家庭と環境 厚生白書 (昭和 46 年版).
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析. 教育心理学研究, 44, 11-22.
- 白井利明 (2015). 青年期のコンフリクトを親子はどのように体験するか—前方視的再構成法を使って—. 青年心理学研究, 27, 5-22.
- 武田伶仁 (2017). 青年期男性における「親子の対決経験」の人格発達の意義—理論構築から実証に向けて—. 国際基督教大学教養学部提出学士論文
- Tyson, P. & Tyson, R. (1984) . Narcissism and Superego Development. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 32, 75-98.
- Tyson, P. & Tyson, R. (1990) . *Psychoanalytic theories of development: An integration*.

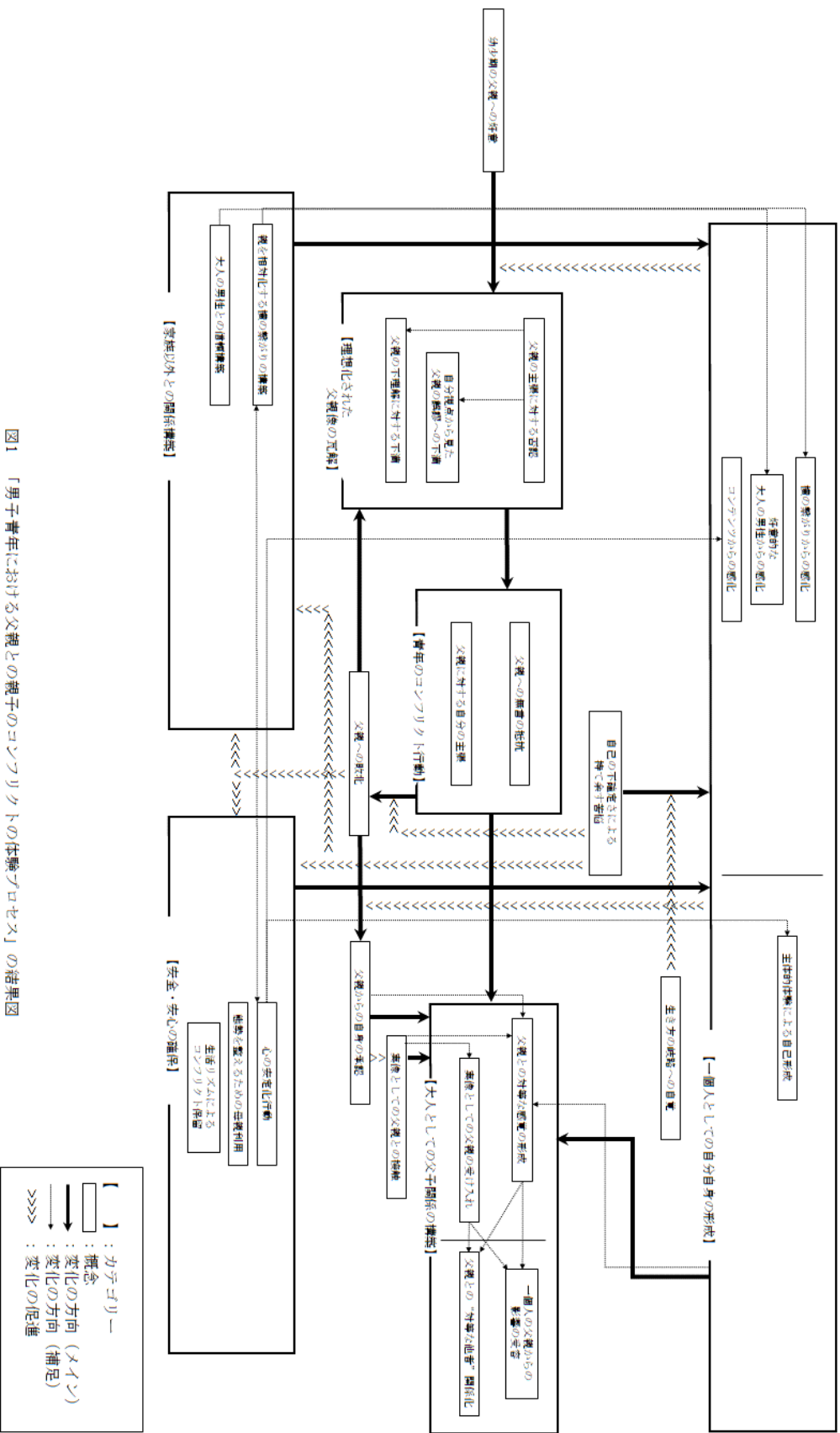


図1 「男子青年における父親との親子のコンフリクトの体験プロセス」の結果図